

令和 4 年 6 月 4 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12247

研究課題名(和文)がん患者の体験知を医療に活かす専門力と患者力の融合型ピアサポートプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a peer support program that integrates expertise and patient power to utilize the experience knowledge of cancer patients in medical care

研究代表者

小野 美穂 (ONO, MIHO)

岡山大学・保健学域・准教授

研究者番号：20403470

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：医療専門職の専門知と体験患者の経験知を融合させた乳がんピアサポートプログラムのモデルケースについて、患者、ピアサポーター、医師、看護師といった関わった立場のすべてからの多面的評価を行い、多くのメリットを得ると同時に、課題も浮き彫りとなった。また、我が国におけるピアサポート活動の現状調査では、運営者は、ピアサポーターの「コミュニケーションスキル」や「個人情報保護・管理」を特に重要視しており、活動場面での困難については「参加者の固定化」「運営スタッフの育成困難」「マンパワー不足」「COVID-19の影響で活動できない」などが挙げられた。施設によって取り組み方や程度は様々であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

専門家のサポートとピアサポートは、内容・質が異なるサポートであり、患者にとって双方重要であり、これらは相互に補完的な役割を果たす。専門力と患者力の融合型ピアサポートプログラムにより、多面的な支援を必要とする患者に、従来の専門的サポートに加え実際の体験に根差した情報や共感といったサポートが可能となり、より包括的で実践的なサービスが提供でき医療サービスの充実につながる。また、患者としてサービスの受け手でもあるピアサポーターが、サービス提供側として医療者と協働することで、患者の声が届きやすい真の「患者中心の医療」につながる。

研究成果の概要(英文)：The model case of the breast cancer peer support program, which integrates the expertise of medical professionals and the experience of patients, is evaluated from all perspectives, including patients, peer supporters, doctors, and nurses, and has many benefits. At the same time as gaining merits, the challenges were also highlighted. In the survey on the current status of peer support activities in Japan, the operators considered that "peer supporter communication skills" and "personal information management" were particularly important. Regarding the difficulties in the activity scene, "fixing participants", "difficulty in training management staff", "insufficient manpower", "cannot act due to the influence of COVID-19", etc. were mentioned. The approach and degree varied depending on the facility.

研究分野：看護学

キーワード：ピアサポート ピアサポートプログラム 体験知 同病者支援

1. 研究開始当初の背景

ピアサポートは、似た問題を抱える人々が信頼関係を育んだり、スティグマを減らしたり、コーピング方法やサポート資源の情報を共有し助けを求めることのできる場を作ったりするために「経験(体験知)の共有」を活用する介入である。主に欧米において、医療者が同じ病の体験をもつピアサポーターと協働しながら苦しむ患者を支えるピアサポートプログラムが多く展開されている。効果として、サポートを受ける側、与える側双方の精神面や QOL に良い影響を与えることや患者のメディカルケアの満足感を高める等、多くのメリットが明らかになっている。

対象となる疾患は多岐にわたっているが、特にがん疾患が多く、がん領域におけるピアサポートプログラムに関するシステマティックレビューでは、そのサポート提供の形態には one-on-one face to face, one-on-one telephone, group face to face, group telephone and group Internet の 5 つのモデルがあることが明らかになっている。看護師にとってのピアサポートという観点で見ると、ピアサポートの概念分析の中で、看護師がピア同士の関わりをケアの質やヘルスアウトカムを向上させるための一手段として、サポート強化の介入の中に効果的に組み込むことが推奨され、ピアサポートは看護職にとって重要な概念と位置づけている報告もある。

一方、我が国においても、近年、ピアサポートは注目されており、特にがん領域においては、がん対策推進事業拡大の一環として、都道府県やがん拠点病院等に対しピアサポーター育成に向けた研修プログラムの要望が打ち出され、2012 年には、国のがん対策推進基本計画の中で、がん患者・経験者との協働を進め、ピアサポートをさらに充実するよう努めることが掲げられた。このように、ピアサポートを患者の重要なサポート資源と位置づけ医療現場で活用していくことへの社会的ニーズが高まりつつある。このような背景を受け、その広がりピアサポート活用の取り組みは徐々に広がりを見せてはいるものの、エビデンスとなるような評価研究は少ないのが現状である。また、2016 年度「がん対策に関する行政評価・監視の結果報告書(総務省)」によると、調査対象となった 36 の拠点病院のうち、ピアサポーターの実績があったのは、26 にとどまっており、ピアサポートの更なる普及に向け、その原因の分析や研修の見直し等の必要性が指摘されている。

そこで、現時点での我が国におけるピアサポートの広がりやピアサポート提供方法・支援環境、ピアサポーター研修方法・活用状況、および課題等について、その現状および課題を明らかにし、動向をとらえる必要があると考えた。実態を明らかにすることで浮き彫りとなる課題への対応を検討し、がん患者の体験知を効果的に医療に活かすことのできる、わが国にあったピアサポートプログラムの在り方を探求する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、がんを経験し様々な体験知をもつ患者の「患者力」を医療に活かし、専門的サポートと体験的サポートを融合させることにより、患者のもつ多様なニーズに多面的に対応し支援していくことを目指す。モデルケースとして行った乳がんピアサポートプログラムを多面的に評価し、我が国におけるピアサポート活動の現状を踏まえた上で、ピア支援をより広く医療の場に適用、発展させていくことを可能にする「専門力と患者力の融合型ピアサポートプログラム」の開発を目指すことを目的としている。

3. 研究の方法

(1) モデルケースとして行った乳がんピアサポートプログラムをプログラム提供側であるピアサポーター、医師、看護師に行ったインタビュー調査を質的に分析した。

(2) 我が国におけるがんピアサポート活動の現状・動向を把握するために、がん診療連携拠点病院一覧に掲載している病院（令和2年時点：401病院）、都道府県でピアサポートに関する事業担当者（がん総合相談に関わる職員）を対象に、がんピアサポート活動やがんピアサポーター研修等に関する質問紙調査を行い、記述統計を行い、自由回答については、質的に分析しまとめた。

4. 研究成果

(1) ピアサポートプログラムのモデルケースである「乳がんピアサポートプログラム」の評価として、プログラムを受けた患者の評価については論文発表を終えており、本科研では、プログラムの提供側であるピアサポーターおよび主治医、看護師へのインタビュー調査結果を質的帰納的に分析した。まず、ピアサポーターへのインタビュー調査から、ピアサポーターがプログラムで体験したこととして、【治療体験を話す】【治療に伴う生活体験を話す】【患者の言葉に耳を傾ける】【患者と分かり合える】【患者が自分を受け入れる手助けをする】【患者の安心した様子に安堵する】【患者の役に立てたことを実感する】【医療者との橋渡しとなる】【自分の人生にも役立つ】【ピアサポーターとしての責任を感じる】の10のカテゴリーが抽出された。次に、プログラムを自身の患者に適用した主治医へのインタビュー調査から、医師が捉える「ピアサポートプログラム」の評価として、【医師のもつピアサポーターの理想像】【ピアサポーターへの期待】、【プログラムへの高い評価】、【医師の考えるピアサポートプログラムの在り方】、【プログラムへの関心度の差】、【ピアの関わりは医療と独立すべき】の6つのカテゴリーが抽出された。最後に、コーディネーター役割を担った看護師の評価について、分析結果として、7のカテゴリー、24のサブカテゴリーが形成された。【ピアサポーター支援が適していると判断する】では、患者が＜体験者の情報を求めている＞＜情緒的安定が必要＞などの判断理由が述べられ、ピアサポーターとの面談決定後【慎重にピアとの面談手続きを進める】ために＜患者にプログラムの趣旨や注意点を丁寧に説明する＞＜患者と治療や背景の似たピアサポーターを選定する＞＜リエゾンナースに協力を求め、必要時の体制を整える＞ことがされていた。並行して【患者への看護的関わり】と【ピアサポーターへの看護的関わり】を意図的にを行い、患者とは＜じっくり話しニーズの見極め＞、ピアサポーターに対しては＜時間的・精神的負担を常に配慮＞＜個人情報管理について念押し確認＞などがなされていた。ピアサポーターとの面談後には【患者の評価を受け】、【ケースを振り返り】、＜ピアサポーターに適した患者の要素＞＜プログラムの課題の明確化＞などの【プログラムの質向上のための検討】を行っていることが明らかとなった。医療専門職の専門知と体験患者の経験知を融合させた乳がんピアサポートプログラムのモデルケースについて、患者・ピアサポーター・医師・看護師といった関わった立場のすべてからの多面的評価を終え、すべての立場から多くのメリットを得ると同時に、課題も浮き彫りとなった。ピアサポートは、がん患者やその家族の助けや力になる一方で、ピアサポーターが接し方を誤るとがん患者やその家族を逆に傷つけてしまったり、ピアサポーター自身が傷ついたりする可能性があることが報告されている。このようなプログラムの効果的な運用には、やはり、ピアサポーターの資質や能力、適性といった要因が重要な鍵となると考える。調査の中で、ピアサポートを希望する患者は、ピアサポーターに対して自然体であること、つまり「患者らしさ」を求めており、その雰囲気や誰にも相談できなかったことを相談させ、自分と同じ、孤独ではないという情緒的サポートにつながり、また、自分と似たような背

景をもつ者を望み、個別的で詳細な情報的サポートを提供できるピアサポーターを必要としていた。また、医師や看護師がピアサポーターに求めていることは、ピアサポーターのレジデンス能力や精神的安定性、客観性、ペーシングできる力、節度をわきまえているなどの成熟性、医療者とうまくやれる協調性などであることが分かった。現在、広く全国で行われているピアサポーター研修については、内容や方法に地域差等が大きく、レベルや項目にはばらつきがあり、総合的な評価には至っていない。効果的なピアサポーター活用を目指すには、現在までの取り組みを評価し、研修のハード面としてある程度のレベルや項目、展開方法を統一する必要があると考えると同時に、患者や医療者が求めるピアサポーターの資質・適性といったソフト面を併せて検討していく必要があることが浮き彫りになった。

(2) 我が国におけるピアサポート活動の現状/動向を把握するために、ピアサポートの広がりやピアサポート活動状況などについて、がん診療連携拠点病院を対象に全国調査を行った結果、がん診療連携拠点病院 405 か所のうち 174 か所から回答（回収率 43%）があった。ピアサポート事業を行っている施設は約 7 割で、行っていない施設の理由として多かったのは「どのように取り組んでよいかわからない」「問題が生じた時の対応方針ができていない」であった。運営担当者は、専任のピアサポート事業担当者がある施設は 1 施設のみで、多くはがん相談事業の担当者が担っていた。また、医療ソーシャルワーカー、がん領域の専門看護師・認定看護師が兼任するケースが多かった。活動を支える環境については、組織の長の理解であったり、新しいことを取り入れる風土があると回答した者が多かった一方で、組織の中でのピアサポート活動の理解者・協力者が少なかったり、必要な予算がついていないケースもあることが明らかになった。ピアサポーター養成研修に重要と考える内容としてほとんどの回答者が挙げたのは「コミュニケーションスキル」と「個人情報保護・管理」であり、活動場面で困難に感じていることとしては、「参加者の固定化」「運営スタッフの育成困難」「マンパワー不足」「COVID-19 の影響で活動できない」などが挙げられ、わが国におけるピアサポートの現状/動向及び課題が明らかになった。

これら我が国の現状を踏まえ、先にモデルケースとして実施・評価したピアサポートプログラムをわが国において広く適用可能なプログラムにモディファイし、「専門力と患者力の融合型ピアサポートプログラム」のあり方について、さらなる検討が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Hiroko OTA, Isako UETA, Miho ONO	4. 巻 26(1)
2. 論文標題 The Hopes of Lung Cancer Patients Receiving Chemotherapy	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Kawasaki Journal of Medical Welfare	6. 最初と最後の頁 9-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田浩子、上田伊佐子、小野美穂、波川京子	4. 巻 18(3)
2. 論文標題 化学療法を受ける肺がん患者のHopeの高低でみた心理的支えの特徴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 インターナショナルNursing Care Research	6. 最初と最後の頁 1,11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 太田浩子、小野美穂、上田伊佐子
2. 発表標題 化学療法を受ける肺がん患者のHHI（Herth Hope Index）点数の高低による心理的支えの特徴
3. 学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上田伊佐子、太田浩子、雄西智恵美、小野美穂
2. 発表標題 女性がんサバイバーの夫との性的関係性の認知的評価とそのコーピング
3. 学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上田伊佐子、太田浩子、雄西智恵美、小野美穂
2. 発表標題 女性がんサバイバーの心理的適応尺度開発の予備調査
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田浩子、小野美穂、上田伊佐子、平松貴子、福田縁
2. 発表標題 化学療法を受ける肺がん患者のHope ~HHI (Herth Hope Index) 点数の高低よる比較~
3. 学会等名 第34回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hiroko OTA , Miho ONO , Isako UETA , Takako HIRAMATSU
2. 発表標題 HOPE of lung cancer patients on chemotherapy
3. 学会等名 The 6th World Academy of Nursing Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上田 伊佐子、太田 浩子、雄西 智恵美、小野 美穂
2. 発表標題 女性がんサバイバーの女性性の視点からみた 自己の受け止め
3. 学会等名 日本看護研究学会第44回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田 浩子、小野 美穂、上田 伊佐子
2. 発表標題 初回化学療法を受ける肺がん患者の Hopeの経時的変化と影響要因
3. 学会等名 日本看護研究学会第44回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Isako Ueta, Chiemi Onishi, Hiroko Ota , Miho Ono
2. 発表標題 How long-term breast cancer survivors perceive their relationships with their partners
3. 学会等名 International Conference on Cancer Nursing (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miho Ono, Hiroko Ota , Yuko Tsuyumu , Isako Ueta
2. 発表標題 Experiences of Peer Supporters in The Breast Cancer Peer Support Program
3. 学会等名 International Conference on Cancer Nursing (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroko Ota, Miho Ono, Isako Ueta, Takako Hiramatsu, Yukari Fukuda, Tsuyoshi Kataoka
2. 発表標題 Power to live by the lung cancer patients under chemotherapy - Comparison by Hearth Hope Index-
3. 学会等名 International Conference on Cancer Nursing (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上田 伊佐子、太田 浩子、雄西 智恵美、小野 美穂
2. 発表標題 女性がんサバイバーの女性性からみた 心理的適応の探求
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野 美穂, 露無祐子, 太田浩子, 上田伊佐子
2. 発表標題 医師が捉える「ピアサポートプログラム」～乳がんピアサポートプログラムを活用した主治医を対象に～
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田 浩子、小野 美穂、上田 伊佐子、平松貴子、福田縁
2. 発表標題 初めて化学療法を受ける肺がん患者の不安と対処 ～HHI点数の高低による比較～
3. 学会等名 第33回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上田伊佐子, 太田浩子, 雄西智恵美, 小野美穂
2. 発表標題 乳がんと女性生殖器がんサバイバーの女性性の視点から捉えた心理の特徴
3. 学会等名 第33回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野 美穂, 太田浩子, 上田伊佐子
2. 発表標題 乳がんピアサポートプログラムのコーディネーターとしての看護師役割
3. 学会等名 第33回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayako Mitsui, Takako Hiramatsu, Kyoko Hosokawa, Miho Ono, Keiko Matsumoto, Misae Ito
2. 発表標題 Significance of cancer support group engagement for cancer patients and spouses
3. 学会等名 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田浩子・小野美穂・上田伊佐子・平松貴子・福田縁・片岡健
2. 発表標題 化学療法を受ける男性肺がん患者のHope
3. 学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上田伊佐子 太田浩子 雄西智恵美 小野美穂
2. 発表標題 女性生殖器がんサイバーが認知する夫との関係性
3. 学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 (編) 安酸史子, 鈴木純恵, 吉田澄恵、(執筆) 青木きよ子, 小野美穂 他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 メディカ出版	5. 総ページ数 302
3. 書名 成人看護学概論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	太田 浩子 (OTA HIROKO) (90321207)	川崎医療福祉大学・保健看護学部・講師 (35309)	
研究 分担者	上田 伊佐子 (UETA ISAKO) (90735515)	徳島文理大学・保健福祉学部・教授 (36102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------